

「なので」

荒木 映子

「ですので」という言葉遣いに違和感を覚えていた。前に述べた文の原因や理由を言うのに、接続詞のように文頭で使われる場合である。文頭では、「だから」か、それを丁寧にした「ですから」が普通で、広辞苑にもこれらは接続詞として挙がっている。それが今ではいっせいに「なので」に変わってしまった。文中ではなく文頭で使う。話し言葉で連発されるだけでなく、メールやレポートや試験の英文和訳や論文にまで多用されている。むかつく。虫唾が走る。(注： ちなみに、これを書いてから、インターネットで「なので」を検索してみると、文頭の「なので」が気になっている人は多らしく、いろいろと文法的解説が出ていて、誤用であることは間違いない。)

最近の日本語の用法で気になるものはほかにもいろいろあって、「ある意味」もその一つである。名詞の副詞的用法ととれば問題はなさそうであるが、「ある意味で」もしくは「ある意味において」と言ってほしい。どの言い方にせよ、「何となく」くらいの意味しか持たないところを意味ありげに言っているとしか思えないが、アジア太平洋戦争当時の軍人が「ある意味においては」とはっきりと発言しているテープ録音をテレビで聞いた時には、我が意を得たり、と思った。彼らなら、「なので」も「であるから(して)」「したがって」になるのだろう。

「告知」という言葉も、最近は軽々しく使われすぎるようだ。がんの告知、生命保険に入る時の病気の告知義務、契約解除の告知、「受胎告知」くらいだと思っていたら、「連絡」とか「通知」という言葉ですませられるような内容にごたいそうな「告知」が使われている。その他、「…であったり、…であったり、とか(して)…」、「え～っ、みたいな」、朝の挨拶に、あるいはメールの書き出しに「お疲れ様です」、あるいは「立ち位置」「真

逆「生きざま」「自然体」等々、聞きたくない、書いてほしくない表現がわんさどある。「嫁」という、蔑称としか私には響かない言葉も嫌だったが、最近では若い夫が自分の妻を「嫁」と呼んでいる！

「なので」は「だからア～」よりはやわらかくて、「…みたいな」と同様、やんわりとかわす婉曲表現であると思われているのかもしれない。職業を聞かれて「銀行関係です」と答えたり、何か言っても必ず「というか」「ていうか」をつけてみたり、断定を避ける傾向がある。英語でも、最近はとみに、はっきり言わない（言えない）で、‘(something) like…’を連発するようだ。こういう表現を使いたがるのは、グランド・ナラティヴやビッグ・クエスチョンを避けるのと軌を一にした、ポストモダンの嗜好あるいはアメリカ化現象であると言ったのは、テリー・イーグルトンだった。「みたいな」で誤魔化して、核心をつく言葉も、根本的な問題の徹底的な議論も封じ込めてしまう風潮がそこにはある。言葉遣いは文化そのものの反映である。というか、文化が言葉をつくるし、言葉が文化をつくる。その意味で、どんな言葉も‘performative’であると言える。今でこそ接続詞になっている「だから」も、もともとは接続助詞だったのだろうし、慣用法が正しい用法となって辞書に載るようになるのは、時間の問題であろう。

こういう言葉遣いの変化に我慢ができなくなったということも、辞める潮時であることを物語っているのかもしれない。私が決別した詩人の言葉をもじって、‘Not with a whimper, but a bang’ といきたいものだ。

なので、本稿の趣旨をできるだけ今風の表現をちりばめて書くとこんなものになるだろうか？

告知

表現文化の皆様

お疲れ様です。

この三月で、定年まで三年を残して退職することにしました。英文の所属だったり、表現文化の所属だったり、とかして、市大には二十五年間勤めたことになります。親の介護がほぼ恒常的にありました。介護をしながら、フルタイムで働くのが限界に達したのです。なので、表現文化の遠足や行事にもあまり参加することができず残念でした。表現文化に移ってからは、英文学の世界からもっと広い世界に足を踏み入れた気がしました。学生や院生の皆さんが持ってくるのは、こちらがほとんど知らない、え〜っ、みたいなテーマばかりで、一緒に勉強するというのが私の立ち位置でした。授業やレポートや卒論を通して、それぞれ才能豊かで、可能性をいっぱい秘めたダイヤモンドの原石みたいな人たちばかりであることがよくわかっています。真逆ではありません。個別の興味を普遍的なテーマにつなげられるよう努力されることを願っています。それから…自分でつじつまがあう生きざまをしてください。自然体ではいけません。

これから、少しでも時間を見つけて私も勉強を続けていきます。ではさようなら。

Cuttabarr Aratree

